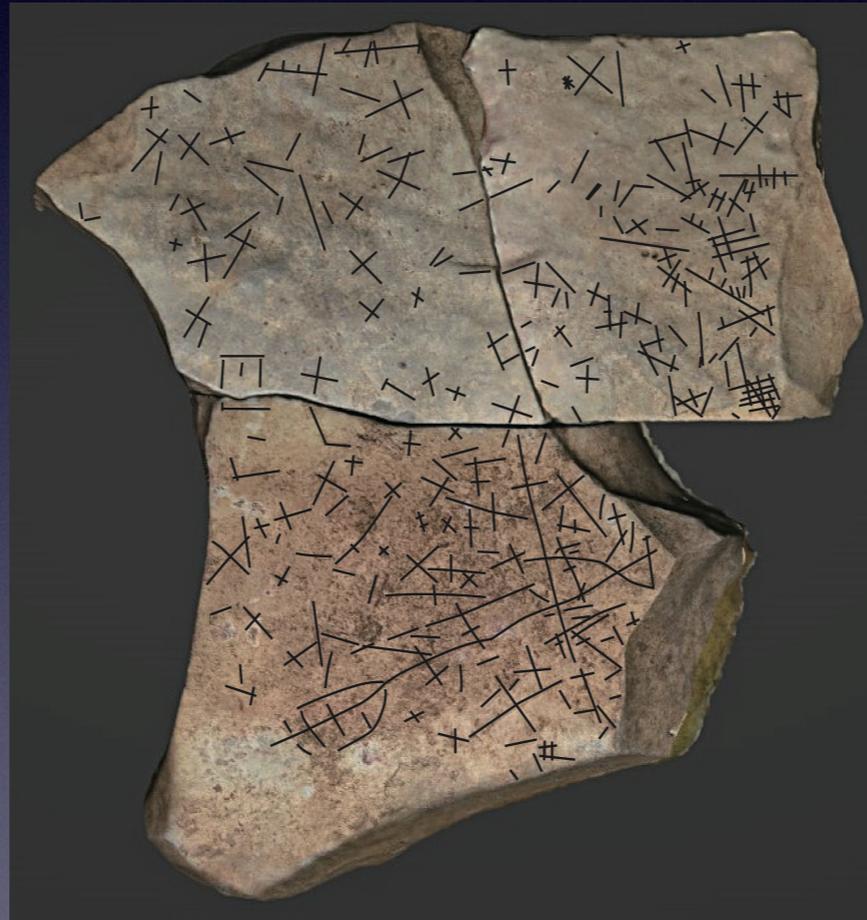


考古天文学からの提言

— 星空景観仮説の紹介 —



北條芳隆（考古天文学会議代表）



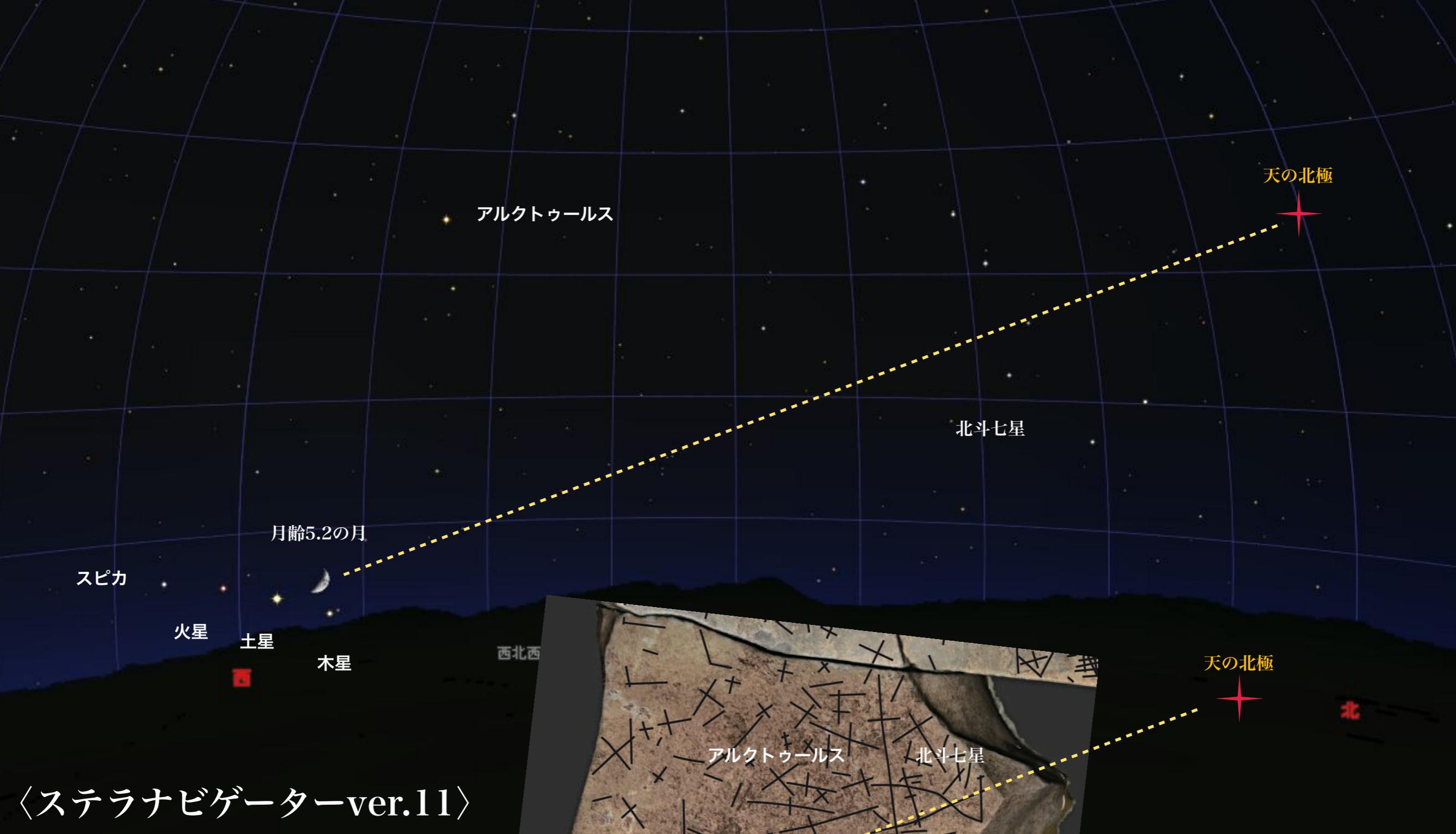
- erian
- Con-Labels (V)
- Equ-Grid (E)
- Azi-Grid (Z)
- Atmosphere (T)
- Arc-Lines (U)
- Pla-Labels (P)

高田裕行説 (1)

蓋石2と3

銀河中心方向
天の川がより広く濃く明るい領域

南西の地平線



〈ステラナビゲーターver.11〉

高田裕行説 (2)

蓋石1と小口部

214年6月30日の情景

後漢の建安19年

田中禎昭氏（専修大学・古代史学）による検証

同じ現象は同時代の中国でも重視されていたことを解明



古代中国の星座 太微垣 五帝座の守護

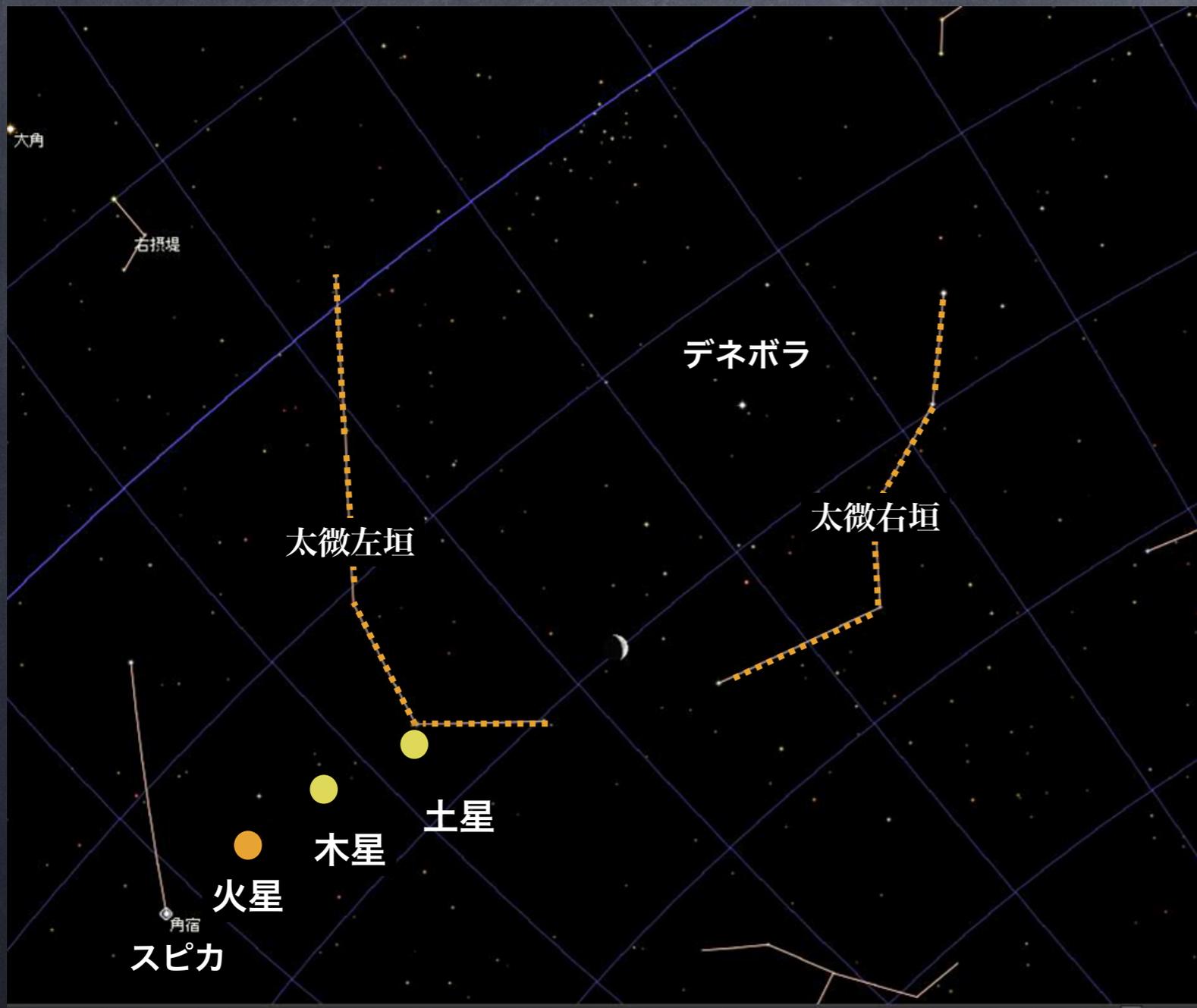
たいびえん

デボネラ

古代中国の占星術

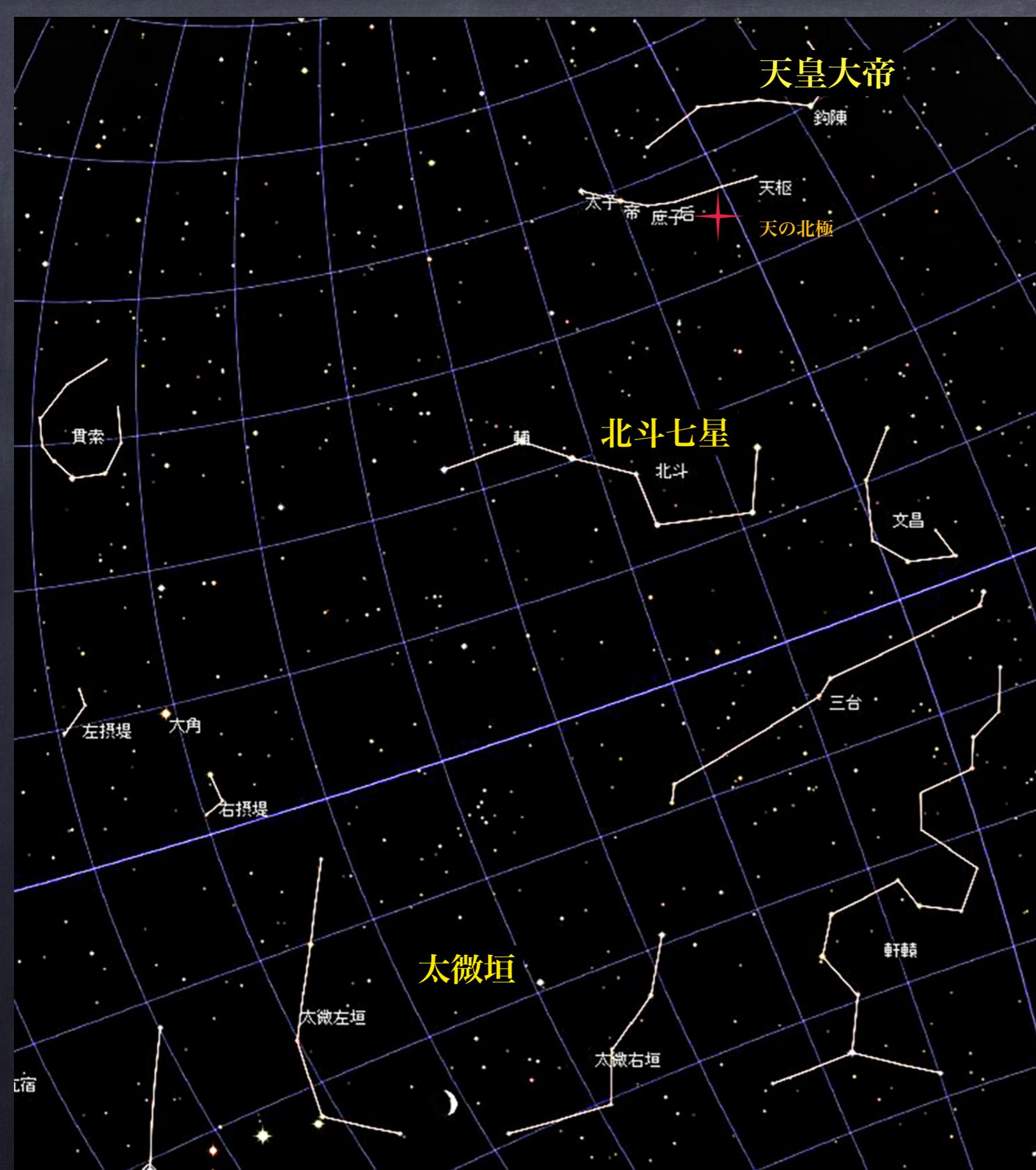
五惑星のうち複数の惑星が「太微垣」近くに並べば吉兆だと考えられた

- 辰星 しんせい (水星)
- 太白 たいはく (金星)
- 熒惑 けいこく (火星)
- 歳星 さいせい (木星)
- 鎮星 ちんせい (土星)



上図は赤道座標で表示
〈ステラナビゲーターver.11〉

とくに火星と木星と土星の三惑星が並び「太微垣」近くで輝く現象は重視された



紫微垣 (朝廷)

北斗

太微垣 (前廷)

左図は赤道座標で表示
〈ステラナビゲーターver.11〉

魏の曹操

曹操は建安18年に冀州の十郡を領地として魏公の位に登り、九錫を与えられた。九錫は王莽に与えられた特典であり、篡奪（禅譲）の前ぶれであることは誰の目にも明らかであった。さらに漢中から帰った建安21年（216年）に曹操は魏公から魏王に就任した。

『後漢書』 献帝本紀・建安18年（213年）



「6月16日,曹操が自立して魏公となり九錫を加えられた。(中略) この年,歳星(木星),鎮星(土星),熒惑(火星)がともに太微垣に入る。」

政治が安定することを予兆する天体現象

しかしこの現象は213年ではなく翌年の夏に生じた

『後漢書』の編纂段階で、翌年に生じた現象を1年前にずらして記載し曹操自立の記事に組み込んだか

新の王莽

居摂3年（AD.8年）に王莽は天命に則して禅譲を受けたとして自ら皇帝に即位し「新」を建国。史上初の禅譲であり、篡奪（身勝手な禅譲）に該当する。建国後はさまざまな制度を整えるが、騒乱が頻発しAD.23年に殺害された。建武元年（AD.25）には光武帝により後漢が再興された。



『後漢書』鄧暉（しつうん）伝

「今、鎮星（土星）, 歳星（木星）, 熒惑（火星）は並んで天の河にあるが、翼宿・軫宿の領域を分かれては去って、去っては戻る現象を繰り返している。このことから、漢王朝は再び天命を受けるであろう」

* 翼宿・軫宿は太微垣の前面にある中国星座

鄧暉は天文や暦法に通じ、天文現象から漢の復興を予言したため、怒った王莽によって監獄に繋がれた。

考古天文学からの提言

天文民俗学の高田裕行氏は石棺墓蓋石の刻線について「星空景観仮説」を構築した。この過程で3世紀前半の3惑星と月齢5.1の会合現象を発見し、頭位側小口部と蓋石1の刻みは天の北極（北辰）に向けた一連の情景を表したものと捉えた。

死者の魂を北辰へと誘う天体図案

この仮説を受けた古代史学の田中禎昭氏は『後漢書』にある惑星会合の記事に着目し、この現象は古代中国の易姓革命思想と深く関連するものであり、占星術でも重視されたことを解明した。

太微垣は天帝の坐す紫微垣（北辰を中樞とする天の皇宮）の前庭であり、その前面近くでの3惑星の会合現象に着目

同時代の中国側で重要視された天体現象を月と併せて図案化したものが蓋石1の線刻の原型であった可能性すら浮上する

公孫康と帯方郡

後漢末、遼東太守となった公孫度は楽浪郡を支配下に置いた（189年）。その後継者公孫康は、建安9年（204年）頃、楽浪郡18城の南半を割いて帯方郡を分置し朝鮮半島南半部の統治体勢を築く。

「是より後、倭・韓 遂に帯方に属す」ることとなる。その後、公孫康は魏の曹操に恭順し、建安12年（207年）、後漢の献帝から左將軍・襄平侯に任ぜられ、帯方郡も後漢の郡として追認された。

中国の占星術、太微垣と紫微垣（北辰）の関係などの天文知識が帯方郡を介して倭国に伝わった可能性